

四十四、和田の「トシとし」に ついて

和田の子どもたちは、「火」が走らない(火事にならない)ようにとの願いと、正月の絵馬を買う資金づくりのために「トシとし」の行事をしていました。

参加者は、小学一年生から中学三年生の男子で、十二月二十日ころから、稲藁・真竹を持ち寄り、お宮の拝殿で、馬(藁で作った馬)に松・竹・梅をさして飾ったもの、釜取り(なべつかみ)、火吹き竹の三種類を作り、年の暮れにリヤカーに乗せ、農家を回りこれらを買ってもらいました。

当時農家は、土間に荒神様を祀り、その下に大きな竈があったので、火の用心と農家の繁栄の縁起ものとして竈の上に飾り、正月を迎えていました。

子どもたちは、集まったお金を持ち寄り、あらかじめ頼んでいた博多の絵馬師の家に絵馬を買いに行き、学業向上と健康増進のため自らの名前を書き、元

旦の早朝にお宮に奉納しました。

この「トシとし」の伝統行事も生活様式の急変が原因で、衰退の一途を辿りましたが、それでも昭和四十二年(一九六七)ころまで行われていました。

今でも絵馬の奉納は、郷土の伝統行事として子ども会育成会の世話で連綿と続いています。



藁で作った馬とそれを描いた絵馬